

阪急電車(阪急電鉄) 「お客様のためには、最良のものを届けよ」

「電鉄」という語。今では、多くの私鉄が〇〇電鉄と名乗っていますが、実は阪急電鉄の始祖、小林一三が考え出した言葉です。「電気鉄道」という語を商号に使用することに、鉄道省があくまで軌道法準拠の「電気軌道」であることを根拠として難色を示したことから、対策として「電鉄」を名付けたわけです。「阪急」はもともと「京阪神急行電鉄」の略称でしたが、社名変更で正式に「阪急電鉄株式会社」(阪急)となりました。京阪電鉄とは一度合併して、再分離した経緯があります。また、阪神電鉄は、村上ファンドの株式買い占めによって阪急に頼ることとなり、「阪急阪神ホールディングス」が誕生しました。「阪急電鉄株式会社」は、その子会社として存在し、阪急東宝グループの一員です。

阪急電鉄の車両はマルーンと呼ばれる落ち着いたぶどう色の車体を特徴とします。そして座席シートは手触りよくふかふかな上に、座り心地も程度の弾力があって満点です。感触がよいのは、アンゴラヤギのウールの高級布地を使っているからです。色は、車内の木目調の調度によく似合う「ゴールデンオリーブ」です。この生地は、「新幹線 700 系、N700 系」



「大阪府議会会議場」「国会議事堂」等の座席に使用されている布地に類するものです。

阪急の高級なブランドイメージは、小林一三の「お客様のためには、最良のものを届けよ」の理念に基づいて形成されてきたものでもあります。創業者と言われる小林一三は、もと銀行マン。阪急電鉄の母体となった箕面有馬電気軌道への出向を命じられたことが、出発点です。この鉄道は、阪神電車のように人口が密集した都市間を結ぶ鉄道と違って、梅田から農村地帯を通り、箕面や有馬の観光名所を結ぶ路線として計画されました。(実際は、険しい山と硬い岩盤に阻まれて、開通は宝塚までとなった)したがって、安定多数の通勤客ではなく、観光客を主体とした経営は危うさを含んでいました。

しかし、沿線を歩いた一三は、広々とした農村地帯にこそ発展性を秘めていることに気づきます。自然豊かで誇大な土地を住宅地として開発し、駅を設置。広大な土地を惜しげもなく格安で提供して関西学院や神戸女学院を誘致。住宅地の開発や土地の提供は、その後永くにわたって旅客収益として還元されています。また、大学のある街として沿線のブランド価値も向上させました。また、宝塚には、歌劇や遊園地を創設し、温泉と相まった娯楽地へと発展させました。さらに、日本初のターミナルデパート阪急百貨店を開設します。今でこそ、鉄道会社の沿線開発や多角経営は常識ですが、総合デベロッパーの始祖として、そのスタイルを築いたのが、小林一三です。また、一三は、東急の影の経営者としても活躍しました。その手法は、五島慶太など多くの経営者に影響を与えました。

これらの実績は、一三を知る人には有名な話です。ここでは、加えて一三の背景にも言及していきたいと思います。一三は、経営者や政治家(大臣に2度就任)として有名ですが、もとは慶応大学出身の文学青年でもありました。また、茶人として逸翁の号を称しています。宝塚歌劇や東宝グループ(もと株式会社東京宝塚劇場)やプロ野球球団の阪急ブレーブスを創設したのも、芸術や文学、スポーツに造詣が深かった所以です。一三の文才はなかなかのもので、在学中には山梨日日新聞において小説「練絲痕(れんしこん)」を連載しています。また、経営者なっても、自ら歌劇の台本を書くなど、幅広く活躍しました。東宝と言っても若い人はピンとこないかも知れません。中年の人ならば「太陽にほえろ!」「俺たちは天使だ!」「ゴジラ シリーズ」、若い人は「現・TOHO シネマズ」といえば、なるほどと思うでしょう。

さて、大学を卒業し、銀行マンとして堅実に歩んでいた人生に突然の転機が訪れます。系列の証券会社の創立を託された一三ですが、折しも世の中は、恐慌に見舞われ立ち消えになります。そこで、箕面有馬電気軌道への出向に一三は応じました。恐慌の折、箕面有馬電気軌道は設立と路線計画にあたって、全株式の半分も引き受け手がないといった苦境に追い込まれていました。経営を担う社長もなり手がなく、専務であった一三は、私財を投じてまで経営に乗りだし社長に就任しました。なぜ、そこまでして…おそらく一三は、箕面有馬電気軌道の可能性と魅力を感じ、勝機があると確信したのでしょう。

農村地帯の過疎地を走る鉄道、商人でなく素人の鉄道マンが経営する百貨店、広大な宅地開発…全てが危うい目で見られていました。しかし、一三には確たるものがありました。「未開発の沿線には可能性とよき環境がある」「便利な所には、暖簾がなくても人が集まり商売が成り立つ」「銀行ローンを組むことで、会社員でも宅地が買える」…一三は常識に捉われず、当時としては、考えられないような斬新なアイデアをもって、次々と事業を成功へと導いていったのです。

もし、世の中が恐慌でなかったら… もし、一三が文学青年でなかったら… もし、一三が銀行マンでなかったら… もし、証券会社が設立されていたら… もし、箕面有馬電気軌道に社長がいたら… もし、箕面有馬電気軌道が過疎路線でなかったら…

今の阪急東宝グループはなかったでしょう。

歴史や人生に「もし〜」はなく、偶然も必然性であるとしたら、一三だけでなく私たちがもまた偶然の必然性をもって生きています。様々の偶然の出会いや経験も、逆境を好機と捉え活かしていくか、見過ごすかによって、先行きは変わってくることでしょう。人生には変えられない宿命と変えることのできる運命があるように…